H.S. サリヴァンの生涯と対人関係論

中　野　明　徳*

H.S.サリヴァンの生涯を振り返り，どのように対人関係論が生み出されたかを探究した。サリヴァンの生涯とその理論に通底するものは「移民」である。サリヴァンはアイルランド系移民の三世であったが，幼少時代にニューヨーク州の寒村に孤立して住んだために，アメリカ文化への同化（acculturation）に著しく不利であった。その上，①父親の影がとても薄く，祖母，母，叔母という女性の影響を強く受け，②小さな村に住んだために同級生に恵まれず，チャムシップが不完全であり，③青春期に入って親密欲求と性欲衝動が衝突して人格の解離を引き起こした。しかし彼の天才たるゆえんは，自身の統合失調症的経験を徹底的に関与観察できる能力があったことにある。とはいえ，サリヴァン自身が安全保障感に脅かされやすく，彼の体験が対人関係論として定式化されるためには，保護的な陸軍と父親像が必要であった。サリヴァンは対人関係論を通して力動精神医学や精神衛生に貢献し，最後はアメリカ人として生涯を終えた。

〔キーワード〕対人関係論　文化への同化　安全保障感　チャムシップ　精神衛生

Ⅰ．はじめに

ハリー・スタック・サリヴァン Harry Stack Sullivan（1892–1949）からどのようにして対人関係論（interpersonal theory）が生まれたのであろうか。サリヴァン（1940）が生前に公刊したのは『現代精神医学の概念』だけであり，死後出版された多くは講義録である。1943年のチェスナット・ロッジにおけるセミナーで「精神障害の病理」を述べているのが『精神医学の臨床研究』（1956），ワシントン精神医学校で1944年から45年にかけて「面接の実践と理論」を述べているのが『精神医学的面接』（1954），1946年から47年にかけて「発達理論」を述べているのが『精神医学は対人関係論である』（1953）である（中野，2007，2008a, 2008b）。サリヴァンは「面接の場は言語的（verbal）ではなく，音声的な（vocal）コミュニケーションの場である」と論じたように，書く人ではなくて，話す人であり，フロイトとはきわめて対照的である。

サリヴァンが1949年にこの世を去った後，遺稿を編集した一人にヘレン・スウィック・ペリーHelen Swick Perryがいる。ペリー女史（1982）はサリヴァンが他界するまでの３年間，サリヴァンが主宰する雑誌『Psychiatry（精神医学）』誌の常任編集者であり，彼と直接する機会に恵まれていた。彼女が抱いたサリヴァンの印象は，「天才で教養人で敏感で目配りの行き届いていた人であるが，はにかみやで緊張度が高い人」であった。彼女がサリヴァンの人生に関心を持ち始めたのは1961年に『分裂病は人間的過程である』（1962）をまとめているころだという。この序文を執筆しているときに，サリヴァンが統合失調性の精神破綻のために病院に収容されたことがあるという事実に気がついた。ペリーはサリヴァンから直接に「自分は病気だった。統合失調症で入院させられたんだよ」という言葉を聞いたという。しかし，サリヴァンの著作の版権を握るホワイト財団はこの事実の公表を禁止しようとした。これによりペリーはこの核心的事実を証明してやりたい気になり，サリヴァン探求への旅が始まった。

結局，ペリーはサリヴァンが入院した時期や病院を特定できなかったが，二十世紀前半にアメリカが生んだ一大思想家を発見するに至った。そこで，本小論では，サリヴァンの生涯をたどりながら，対人関係論の誕生を探ってみることにする。

Ⅱ．サリヴァンの家系

サリヴァンは，1892年２月21日に，ニューヨーク州シェナンゴ郡の郡庁があるノーウィッチという小さな町で生まれた。両親ともにアイルランド系で，父はティモシー・サリヴァンTimothy Sullivan（当時35歳），母はエラ・メイ・スタック・サリヴァンElla Mae Stack Sullivan（当時39歳）である。

アイルランド人がシェナンゴ郡に移住してきたのは1840年代で，鉄道と運河の建設に従事した。ノーウィッチの人口は約５千人であり，３歳になる前に，母親の育った同郡のスマート村に引っ越したが，この村の人口は３百人に満たなかった。ハリーは16歳までスタック家の祖母の家で育ち，サリヴァンの運命はアイルランドの歴史と切り離すことはできない。アイルランドでは，母方のスタック家は土地を所有するジェント

＊：総合教育研究センター・教育相談部門

リー階級（貴族のすぐ下）だという自尊心をもち，父方のサリヴァン家は氏族といわれる古代ゲール族の子孫で，土地財産を無くしているのは宗教的な節操であり，イングランドへの反抗であるという自負があった。サリヴァンの家系を図１に示した。

１．母方の家系

サリヴァンの母方祖父マイクル・スタックMichael Stackは，ハリーが３歳になる前に世を去っているので，スタック家の神話を話したのは母親であろう。母親エラ・メイはよく「スタック家の一族は必ず専門職を選んだ。教育者でなければ法律家か医師か聖職者だった。私がお前のお父さんと結婚したのが最初の例外だった」と述べ，ハリーにスタック家の期待をかけた。成人したハリーが自分のシンボルにしたのは馬であり，これはスタック家の神話的先祖と関連するものであった。現実に専門的な訓練を受けたのは，弟のジョンと，ジェームズの子で法律家になったバーソロミューだけであった。

祖父マイクルが，大飢饉のアイルランドからニューヨーク州シェナンゴ郡に入植したのは1849年であり，その前にマイクルのイトコである，ジェームズ・スタックとその兄のトーマスが到着していた。ジェームズは11人，マイクルは４人の子どもをもうけ，村でアイルランド系カトリックの子どもはこの子どもたちだけだった。マイクルが聖職者の道をやめてアメリカに移住したことをスタック家の子孫は恥としていた。「ハリーの人生の淋しさの一部はマイクル一族が宗教儀礼をなおざりしたためだ」と一族からいわれていたという。1850年代初期にマイクルはスマーナ村に来て，少しずつ農場を手に入れた。エラは長女としてきょうだいの保護者役をさせられ一家の雑用を引き受けたため，年齢を重ね，1885年にティモシー・サリヴァンと結婚した時は32歳であった。

２．父方の家系

サリヴァンが父の家系に言及していることは非常に少ない。祖父ウィリアム・サリヴァンWilliam Sullivanは23歳でアイルランドを離れ，マイクル・スタックとほぼ同じ時期にニューヨーク州で鉄道建設に従事した。祖父はゲール語の読み書きができたという。祖母ジュリア・ギャルヴィンJuria Galvinはアイルランドを去ったときは人妻であったが，大西洋で嵐にあって夫と幼児を失った後に，ウイリアムと再婚し，36歳でティモシーを産んだ。この夫婦はなかなか農場を所有することができず，ジュリアが53歳である1874年にウィリアムが事故死を遂げた。ジュリアの子どもは彼女の言いつけで働きに出されたが，子どもが結婚するたびに彼女は自分の人生から子どもを切り捨てていき，ティモシーとマイクルだけしか自分の息子だと認めなかった。ジュリアの子どもたちはほとんど農場を持てずに世を去っており，サリヴァン家はスタック家よりも家格が低いと感じられていた。

ハリーは自分の才能はスタック家から由来するものという考えを排して，サリヴァン家とスタック家の運命を分けたものは「環境の問題」であると認識した。サリヴァン（1953）が打ち出した**人類同一種の要請（仮説）**（one-genus postulate）は，人生に成功して幸福であろうと，惨めで精神障害を患っていようが，どの人もすべて何よりもまず端的に人間であるという見方である。サリヴァンは，異常な対人の場は言語や習慣の相違によるものを除けば，場を構成する人間の成熟度の相対的差異の関数であると考え，人間の同一性・共通性の研究を目指した人格論を展開したのである。

図１ ハリー・スタック・サリヴァンの家系

＜母方スタック家＞

- □**マイクル・スタック**（祖父，1817－1894）
  - ○**エラ・メイ**（母，1853－1926）
  - □エドマンド・ジェームズ
    - □レオ・スタック
  - □ジョン・バーソロミュー
  - ○**マーガレット・アン**(1868？－1930 年代)
- ○**メアリ・ホワイト**（祖母，1828－？）
- □トーマス・スタック（マイクルのイトコ）
- □ジェームズ・スタック（トーマスの弟）

＜父方サリヴァン家＞

- □**ウィリアム・サリヴァン**（祖父，1825－1874）
  - □ジョン
  - □**ティモシー**（父，1857－1931）
  - □ウィリー
  - □ジェレミア
  - □マイクル
  - □フランク
  - ○エレン
  - □エドワード
- ○**ジュリア・ギャルヴィン**（祖母，1821－?）
- □パトリック・サリヴァン（ウィリアムの弟）
- □ウィリアム・Ｈ・サリヴァン（父のイトコ，法律家）

Ⅲ．サリヴァンの生涯とその理論

１．幼児期（Infancy）

ニューヨーク州シェナンゴ郡ノーウィッチ町で，1885年12月に母エラ（32歳）とハンマー会社熟練工の父ティモシー（28歳）が結婚した。ハリーの誕生は1892年２月21日であるが，その前に２人の男子が夭折しており，事実上一人っ子として育てられた。母は39歳で産んでいることから，ハリーは母親から相当に庇

表１　サリヴァンの年表

西暦	歳	出来事
		＜シェナンゴ郡時代＞
1892	0	２月 21 日，ニューヨーク州シェナンゴ郡ノーウィッチ町にて出生，父ティモシー，母エラ
1894	2	母の精神的破綻，スマーナ村に引越，祖父マイクル・スタッフの死，父がスタック農場を継ぐ
1897	5	小学校入学
1900	8	クラレンス・ベリンジャーと友人になる
1903	11	祖母メアリ・スタックの死
1904	12	堅信礼を受ける，教名フランシス
1908	16	ハイスクール卒業，コーネル大学入学，祖母ジュリアの死
1909	17	コーネル大学停学，フロイトがアメリカ訪問
		＜シカゴ時代＞
1911	19	シカゴ医学校入学
1917	25	シカゴ医学校卒業
1918	26	陸軍志願
		＜病院勤務時代＞
1921	29	ウィリアム・アランソン・ホワイト院長のセント・エリザベス病院に勤務
1922	30	ロス・マックリュア・チャップマン院長のシェパード病院に勤務
1923	31	クララ・トムソンと出会う
1924	32	アメリカ精神分析学会正会員
1926	34	母エラ（73 歳）の死，エドワード・サピーアと出会う，フェレンツィのアメリカ滞在
1927	35	ジェームズ・インスコー（養子）同居
1929	37	世界大恐慌
		＜ニューヨーク市時代＞
1930	38	シェパード病院をやめてニューヨーク市に移る
1931	39	ニューヨーク市で開業，父ティモシー（74 歳）の死
1933	41	フェレンチの死，ホワイト財団設立
1936	44	ワシントン精神医学校設立
1938	46	雑誌『精神医学』発刊
		＜ベセズダ時代＞
1939	47	サピーアの死，フロイトの死，ベセズダに移る
1940	48	『現代精神医学の概念』出版
1942	50	チェスナット・ロッジ病院で講義開始
1948	55	ルース・ベネディクトの死，ロス・マックリュア・チャップマンの死
1949	56	１月 14 日，パリにて死

護され，母親に両義的であったといわれる。彼は母のように自分以外の人間に共感してやさしい人である一面，まったく非感傷的で感情を示さない人物であったといわれている。

２．小児期（Childhood）

サリヴァンは30ヵ月（２歳６ヵ月）を小児期の始まりの標識として用いる。つまり，音声言語という分節化された音を発する能力と音声言語に関連する能力の発達が始まるとしている。

ハリーが２歳半から４歳まで母親が消えてしまい，母親役が代わった。ハリーが２歳半の1894年夏，不況にもかかわらず父ティモシーが家を購入したことから，母エラが狂乱して消えたという。ハリーはスマーナ村のスタック家の農場に移り，祖母がハリーの面倒をみたが，祖母はゲール語を話しゲール風のジェスチュアであったから，ハリーは戸惑い怖がったという。エラの状態の詳細は不明だが，精神的破綻らしく，そのためにハリーは祖母と過ごす期間が長く，母親よりも訛りが強かった。ペリーによれば，近隣の病院のカルテ類にエラの名前はないので，彼女は弟のところに行ったかもしれないという。ちなみに母親はなくなった児のベビー服を宝物のようにしまった人で，サリヴァンによれば,「病的な」悲しみを示した人である。

1894年12月に祖父マイクル・スタックが死亡したために，父は入り婿となってスタック農場を継ぐことになった。以後，ハリーは14年間シェナンゴ郡スマート村に住むことになった。1894年の不況以後，シェナンゴ郡は没落し敗北感のゆえに，スマーナには地元民根性が根を生やし，マイクル・スタックの子ども時代にはなかったが，その孫たちは仲間はずれにされてしまった。ハリーは「外国人である」「カトリックである」ゆえに孤立したのであるが，結果的にはむしろ彼を救った面もある。

父はひきこもり型，はにかみ屋で，一日中農場で働いた。家にたびたび訪れたのは叔母マーガレット（マギー）であり，彼女は短期間近くの学校の教師をしていた。母親の影は薄く，幼年期の持続的な重要人物は祖母だった。スマーナの学校でサリヴァンがのけ者になったのは祖母ゆずりのアイルランド訛りのせいであった。両親や祖母の考えに食い違いがあり，サリヴァンは30ヵ月の子どもにこの種の混乱が精神的なハンディキャップを背負わせるという。

サリヴァンの幼年時代の親友は家畜であり，犬であり，空想上の遊び仲間（compeers）であった。通常，小児期が終わりに近づくと，現実の人間が遊び友達になってくれることを思い描くようになる。

３．児童期（Juvenile era）

ハリーがスマート村の学校に入学したのは５歳半で

あり，それまでの人間との接触はヤンキー文化に同化されていないシャナンゴ渓谷の親戚に限られていたので，入学はこれまでの人生最大の変化だった。サリヴァンは，入学は人間を社会化する影響力としての家庭のもつ限界あるいは特異性が治癒される最初の発達段階であるとみた。

ハリーは小柄な子で，字は入学前に読めており，話し言葉より書き言葉にずっと馴染んでいた。祖母はゲール語を話すので，少なくとも一日のうちにゲール語を話す機会があった。新しい単語に出くわすと必ず正確な意味を辞書で調べた。このためにサリヴァンの概念は硬くわずらわしく響くと批判されがちであり，自分がかいたものに批評しすぎてなかなか刊行ができなくなったといわれる。

ハリーは通学のために小学校の初めの３年間は農場から村までの１マイル半（2.5キロ）を歩き通さなければならず，冬の１，２週間は大吹雪でどの道も通行止めになった。ハリーが村の学校に通学していた時期の初めの７年間の校長，通称“プロヘェッサー”バッツButtsは，彼の読書力や化石の同定力を誇りに思い，特別な生徒として扱った。アイルランド系カトリックの生徒が学校のピカーであることは，他者の羨望をかき立てた。サリヴァンは晩年に「自分は講演がしにくいという障害があるのは，『羨望にとらわれている多数の者に囲まれ，特権を与えられすぎた』本質的に孤独な小学生の時の経験によって生じた」と話している。サリヴァン（1953）が児童期に身につけるべきスキルとして挙げた**妥協**（compromise）と**協業**（cooperation）は彼自身には欠けていた。これはサリヴァンがいじめやからかいを防ごうとして，背をかがめる生き方をしたか，早熟ぶりをひけらかしたためであろう。

精神科医の同僚たちはサリヴァンついて，①人を避けてひきこもりがちな気むずかしい“アル中”，②どこか見栄っ張りの上昇志向者，知的気取り屋，③これまでにこんな人はなかったほどの最高にやさしい心の持ち主，読みの深い人，と評している。サリヴァンはこの三つの面を全部一人の人間に見せることはなく，**対人関係の数だけ人格がある**と主張している。ハリーの幼少年時代に人間関係を結んだ男性がごく少数であることが特徴であり，しかもその男性がはっきりとした相違点をもち，①は父親，②は成功者のエド叔父（エラの弟），そして③は“プロヘェッサー”バッツがモデルになっているとみられる。

４．前青春期（Preadolescence）

ハリーは1900年秋，８歳半の時に一人の友人を得た。彼の名前はクラレンス・ベリンジャーClarence Bellinger（1887-1952）で，当時13歳半であった。二人の少年は多くの点で似つかわしくないペアで，クラレンスは背が低く肥満型で気むずかし屋，ハリーはほっそりして年齢のわりに見かけが幼かった。ベリンジャー家はアングロサクソン系プロテスタントだったが，ハリーはすでにスマーナ村の学校で３年間過ごしており，**親友（チャム）**が欲しかった。

ベリンジャー家の農場は，サリヴァンの家から１マイル先にあった。当時の子どもは徒歩通学が当たり前だったが，ベリンジャー家が裕福だったので，二人はベリンジャー家の馬車で一緒に登下校する仲となった。二人とも一人っ子であり，それまでお互いに打ち明け手がいなく，「村の学校で一番できる子」で威張っているとみられ，村の子どもたちからはアウトサイダー扱いされ，羨まれ嫌われる二人組となった。それでクラレンスとハリーは二人だけの遊びを考案しなければならず，彼らの楽しみは読書と議論であった。本はマーガレット叔母がふんだんに補給してくれた。

サリヴァンは，12歳つまり小学校を終えるまでに「似た地位の」相手と短期間であっても，信頼関係をつくれなかった人間はこの信頼関係を生かす上で大きなハンディキャップを負うと考えている。サリヴァンはこの「自分と似た人を愛する」人間関係を**同類愛的**（isophilic）と称した。サリヴァンはこの重要な体験をクラレンス相手によって得たのであるが，クラレンスはサリヴァンほどに得ることがなかったらしく，後年クラレンスはニューヨーク州立病院の精神科医になったが，サリヴァンの悪口を言っていたという。大人になってからのサリヴァンはクラレンスのことを誰に対してもひとことも口にしなかったという。つまりサリヴァンは自分の親友関係の思い出をけがれのないまま心の中にいだきつづけたということになろう。

ハリーもクラレンスもともに一人っ子であり，母親の愛情がそそがれ，二人とも母親は重要人物であった。二人の父親は農場主で，とりたてて特徴がなかった。サリヴァンの父親は母親が1926年に亡くなるまでは他人同然で，驚くべき寡黙な人で，息子が医者になってようやくお互いの考えが分かるようになったという。サリヴァンは父親との関係を「病的な隔離」と考えていたようである。

11歳までのハリーに影響を与えた人に同居の祖母メアリ・スタックがいる。祖母は半世紀にわたって農場を支配していたばかりでなく，娘エラがハリーをうまく扱えないようにして1903年に世を去った。祖母はハリーに厳しい躾をしたばかりでなく，両親に対しても説明不能な力を有していたということである。祖母の死後は，マギーがハリーにとってもエラにとっても重要な人物になっていった。父ティモシーは女たちから離そうとハリーに農場の手伝いをさせようとしたができず，ハリーは勉強に熱中したという。

ハリーの幼年時代を通じて，父からの唯一の要求は教会に忠実であることだった。1904年10月，ハリーは堅信礼を受け自分で教名をフランシスFrancisと決め

た。アシジのフランシス（1182-1226）は自然と一体化し，小鳥へ向かって説教したという聖人であるが，ハリーも犬や馬に特別の愛情を抱いていた。サリヴァン（1954）の『精神医学的面接』は詳細をきわめるが，不思議なことに患者の宗教的及び人種的なデータを得ることについては書かれていない。しかしペリーは，サリヴァンの愛，親密性，性欲についての理論はカトリック教会の教えと深い関係があるとみる。

アイルランド・カトリック教会は聖アウグスティヌスの教えに忠実で，愛と性欲をまったく別個の感情だと考える。完全な愛はまず神に向かい，それから人間関係の愛となり，性欲は単に子どもを産む手段にすぎない。サリヴァン（1940）は，「**愛**とは，ある特定の相手が体験する満足と安全とが自分にとって自分自身の満足と安全と同等の重要性を持つようになりはじめることである」と定義したが，アウグスティヌスの影響がある。この禁欲的な愛の定義からすれば，サリヴァンがフロイトの快楽的な愛を受け入れられず，その大部分を**性欲**（lust）の項に入れたのは当然であった。サリヴァンは，性欲とはまったく無関係な，親友との水入らずの**チャムシップ**（chumship）に完全な愛が内在しているという考えに固執した。これがサリヴァンは同性愛だという噂の根拠になっている。

ハリーは過保護の母親と人見知りをする父親にはさまれて農場で育った一人っ子であったが，未婚の叔母マーガレットの存在が大きい。教師をしていた叔母は都会的な知性をハリーにもたらした。母親のエラは人生に敗北して愚痴の多い「半廃人」になっていくが，マーガレットはけっして敗北しなかった。サリヴァンはマーガレットからの性質を受け継いで生涯をもちこえた。

5．青春期前期（Early Adolescence）

ハリーとクラレンスの二人は６年間にわたってそれぞれの知的興味を育てた。年齢差は二人の悩みだったが，ハイスクールを卒業後，二人は共に精神科医になった。おそらく二人は医師という専門職を論じ合っていたのであろう。クラレンスは1906年６月，ハリーより２年早くスマーナ・ハイスクールを卒業して，以後４年間，ニューヨーク州のシラキューズ大学医学部に行った。大学卒業後精神科研修医になって，ワシントンのセント・エリザベス病院長のウィリアム・アランソン・ホワイトとの接触がある。約10年後にサリヴァンも精神医学の訓練をホワイトから受けた。

ハリーがハイスクールを卒業するころ，郡の自殺率がこの10年間で最も高く，この他に殺人，精神障害が多いことから，精神鑑定医と弁護士が権威あるエクスパートであった。この頃，父のイトコのウィリアム･H･サリヴァン判事が活躍している。なお1909年にはフロイトがアメリカを訪問して，アメリカの厳しすぎる性道徳から生じる問題を批判している。

ハリーは1908年６月にハイスクールを卒業し，シェナンゴ郡で唯一，コーネル大学の奨学金獲得者になった。９月にコーネル大学のあるイサカに向かい，文理学部に所属した。彼の関心は物理学者になることであり，一学期の成績はかなりよかったが，二学期末には「1910年２月まで停学」となった。

1909年，サリヴァンが「青春期が出現しうる最も遅い年齢」である17歳を迎えるが，「歪んだ環境」にあった。彼は同い年の仲間のグループと正常な接触を持てないようになっていたし，自分自身の身体への関心は母親によって厳しく見張られていたし，それをカトリック教会の教義が強化していた。彼の思春期の遅れは，生育期にほとんど女性ばかりの間で過ごしたからであろう。彼はどのような親密な身体的接触をもしないように周到に気を配りながら前思春期をやっとのことで通り抜けて青春期を迎えたのである。

しかしイサカの生活は**性欲衝動**の登場を促すものであった。サリヴァン（1940）は，勉強に集中できない若者がよく映画に行き，「幻想の中だけの情事」を思い巡らし，勉強などはどうでもよくなった話をしている。この若者とはまさにサリヴァンその人であろう。コーネル大学は男女共学であったので，恋の対象が同級生だったかもしれない。以下にその部分を引用してみよう。

> 自分は駄目な人間だという原因をつくっていた連中のことは若者の心にまったくさざ波を起こすことさえなくなった。連中は「あいつは一体どうなったんだ」と不思議がったが，若者の方で連中のことなどまった眼中になくなった。この“情事”は何ヵ月かかかって進行したが，同時に若者は統合失調症という大団円（dénouement）に向かって歩んで行った。愛の対象の現実性はただ写真だけで十分であった。
>
> また，ある場合には夢想が肥大を重ね，運悪く，その若者は思いのたけを言わずにはおれなくなる。ところが，相手の少女はびっくりし，気分を悪くし，「怖いわ」とさえ思う。ひとり相撲だったことがばれると，それは彼のひ弱な**自己評価**をさらに傷つける。「すべて誤解だった」というショックを受けた直後に**精神病**すなわち重症の精神障害が若者の言動の中に現れることも少なくない。

サリヴァンは，**性欲の力動態勢**（dynamism）が17歳ではじめて出現するのは不吉な徴候で，しばしば急性精神病を起こし，長い間棚上げされた性の意識が精神病状態の中で出現すると述べる。前青春期に適正な安全保障感を持たないまま来た人が，性欲と性器的オーガズムへの渇望に直面させられ，同時に得体の知れない歪んだ異性への関心が現れる場合，精神病が発現するとみた。いわゆる同性愛者でも，かつて一度は

異性愛を垣間見せているという。サリヴァンにとってクラレンスとの前青春期体験は異性愛の準備として不十分であった。コーネル大学での危機は，クラレンスの代わりを見つけることできずに，孤立が急速に高まり，性的白昼夢を追う以外に道がなかったことを意味する。

サリヴァンは孤独のせいで，寄宿舎に巣くう悪党の学生たちに接近しはじめたが，これによりトラブルに巻きこまれた。悪党な学生がドラッグストアに配達された小包を店が開く前に盗むという行為をハリーにやらせた。ハリーは郵便を詐欺に利用した罪で逮捕され，何らかの施設，監獄か少年院か精神病院に送られた。彼は復学することはなく，２年間にわたって居所は不明である。この間彼は**統合失調症状態**にあったと考えられる。

ペリーは10年以上も探索したものの彼がどこに入院していたか補足できなかったが，知られている若干の事実を集めると自然なストーリーを組み立てることができるという。ペリーは，サリヴァンがニューヨーク市立ベルヴュー病院の精神科病棟に入院したと推測する。というのは，スマーナの家庭医サーストン･G･パッカーと精神科医である息子フレイヴィアスが決定的な役割を演じているという。サーストン・パッカーはベルヴュー病院付属医学校を卒業していることから，フレイヴィアスの親友の医師メルナス・サルキス・グレゴリーがベルヴューでハリーの介護している可能性があるという。さらに，フロイト理論のアメリカへの紹介者A・A・ブリルBrillが1908年から1911年までベルヴュー病院精神科病棟の顧問医をしていた。ブリルはサリヴァンよりも20歳離れていたが，サリヴァンが医者になってから相互に信頼をよせていた。ハリーに医学校を勧めた医者が２人いるらしく，その一人は父のほうのパッカーであり，もう一人はブリルかグレゴリーとみられる。

1911年，サリヴァンはシカゴ医学校に入学した。この学校はシカゴ大学の一部ではなく，インディアナ州のヴァルパレーゾ大学の医学部門であった。1915年に卒業に必要な単位を全部取得していたが，授業料を稼ぐために卒業を1917年まで遅らせている。マーガレット叔母が医学時代を通じて毎週送金した。彼はシカゴで母親が着せた幻想を脱ぎ捨て，レオ・スタック（エド叔父の息子）という成功したモデルを追いかけることやめ，クラレンス・ベリンジャーというモデルも捨てた。こうすることによって，アメリカ的成功の基準に縛られることが終生なくなった。

６．青春期後期（Late Adolescence）

1915年から1921年にかけてのシカゴ時代は，サリヴァンが職を見つけようと苦闘する時である。彼が統合失調症状態に陥ったのは医学校入学前であるが，統合失調症を理解したのは，産業革命によってうちのめされたシカゴの移民たちについての経験からである。大都市のスラム街で暮らす若者が絶望して刑務所で一生を終わるような行動を精神病院行きとなる代わりにやってしまうことをサリヴァンは見た。サリヴァン自身，**安全保障感**（security）を求めて苦闘したのである。

1917年の医学博士の学位記には，スタックの家名を使ったハリー・スタック・サリヴァンの名が書き込まれている。医学校の出席を止めて学位を取るまでの２年間，彼は学位を持たないままで製鉄所の産業外科医やイリノイ州兵（軍曹）になっている。その後のサリヴァン（1962）は1916年から1917年の冬にかけて約75時間の精神分析を受けたというが，一体どこで受けたのかはわからない。ペリーはアメリカにフロイトを紹介した長老A.A.ブリルかもしれないと推測する。また，この時期のサリヴァンがもう一度統合失調症的体験を経過しつつあったと思わせる手がかりがある。この当時のサリヴァンは就職先を求めて，何枚も履歴書を書いているが，名前の表記，住所，生年月日を変えており，逆境に陥るとサリヴァンは必ず体裁をとりつくろった。1918年から**陸軍**に志願して新兵の身体検査と医学的管理に服した。虚偽の申告の裏には，傷ついた**自己評価**につきものの不安の存在があったということであり，これついて彼は十分に認識できていた。また同時に不安をごまかす手段としての**飲酒**が始まったのもシカゴ時代である。いずれにせよ，ウィリアム・アランソン･ホワイトWilliam Alanson White（1870年生）のもとで自分の進むべき**アイデンティティ**を発見させたのは陸軍であった。

７．セント・エリザベス病院時代

1918年第一次世界大戦が終わり，サリヴァンが**精神神経科医**（neuropsychiatrist）となるのは1921年である。この間選抜徴兵局顧問となって復員軍人の心理的ストレスのパターンを観察するようになって，**予防精神医学**（preventive psychiatry）に関心をもつようになった。1921年，復員軍人局付連絡将校として，ウィリアム・アランソン・ホワイトが院長であるセント・エリザベス病院勤務を命ぜられて，シカゴを去ってワシントンに赴くが，シカゴ学派の社会学者との絆はその後も続いた。

ホワイトの周りに集まった人を見るにつけて，孤立と生存闘争に苦闘したサリヴァンは，幸福も絶望も絶えず変転し，現在あるいは過去の**対人関係**に甚だしく左右されることを意識させられた。ホワイトは人をやる気にさせる名人で，セント・エリザベス病院を20年以上前から国民的施設に仕上げており，この病院は患者に対して温和に介護し，職員の自発性・積極性を奨励し，特に精神病患者にも力動的に理解する**力動的精神医学**（dynamic psychiatry）を活用していることで

有名であった。この病院にはフロイトの力動精神医学を取り入れたエドワード・ケンプEdward Kempfも関わったことがあり，サリヴァンの人格論，前思春期，**自己評価**（self-esteem）の用語に影響を与えている。ホワイトやジョンス・ホプキンズ大学のアドルフ・マイヤーAdolf Meyer（1866-1950）は，アメリカの社会に古典的精神分析をそのまま取り入れることには懐疑的で，精神障害を精神分析に理解する力動的精神医学を発展させた。

コーネル大学での屈辱体験をもつサリヴァンにとって，サリヴァンがホワイトに惹かれた理由の一つは，ホワイトが犯罪者は本質的には他の人間と何ら変わるところがないという**人類単一種仮説**（one-genus postulate）を抱いていたからである。これは後にサリヴァンがつくった，**狂人も犯罪者も正気な人との差は量の違いに過ぎない**という定式と本質的に同じである。ペリーは，社会学的立場からみれば，サリヴァンの最大の治療者はホワイトであったとみる。

８．シェパード病院時代

1922年サリヴァンは連絡将校の地位に満足できなくなり，フルタイムの臨床医のポストを求めて，ホワイトの推薦状のもとに，ロス・マックリュア・チャップマンRoss McClure Chapman（1981-1948）が院長であった，メリーランド州タウスンにあるシェパード・アンド・イノック・プラット病院（Sheppard and Enoch Pratt Hospital）に移った。サリヴァン（1962）は1922年12月からシェパード病院での仕事を開始し，わずか８年で彼の最も重要な臨床研究が完成した。これが可能になったのはチャップマン院長が前例のない特権を彼に与えたからである。チャップマンは1920年から院長であり，若い精神科医の研究に便宜を与えた。シェパード病院は210床の小規模なものであり，1923年からサリヴァンの数々の要求がゆっくり実行に移された。彼は男子の小病棟を受け持ち，それを病院全体切り離して運営していった。サリヴァンはこの病棟に女性スタッフが一人もはいることを望まず，男子の看護士を精選した。また統合失調症の思考を記録する装置を備えた。結果として彼は，研究的な状況設定の中であるが，本質的には**同性同級社会**（one-class and one-sex society）をつくったのである。彼は医師であるから看護士や患者よりも高いステイタスであったが，このステイタスはできるだけ抑え，自分の病棟内では看護士に「助手」の待遇を与え，自分の思想や技術を教育した。その結果，彼らは自分で考えて行動できるようになった。今日でもこういう病棟は殆どないであろう。

この病棟は６床からなり，物理的に他から独立していた。作業療法とレク療法は部分的に独立，水治療法と物理療法は独立して活動した。特に看護を他から独立させ，全体的に完全な指導下に置いた。これにより医師の監督下に働く職員が患者との良好な関係から生まれる**自尊心**（self-respect）を育てることに成功した。このきめ細かな治療計画は円滑有効に作動して，患者がよくなり，はじめから高い世評を得たという。サリヴァンはこの治療成果を**社会的治癒**（social recovery）と言った。ここにはサリヴァン自身が幼少年時代に必要だった善意の**親密さ**（intimacy）が不可欠なのである。前思春期で述べている親密さについてのサリヴァン（1953）の定義を再度みよう。

君たちは，**対人的親密さ**（interpersonal intimacy）とは性器を触れ合わせることなんかせずに，実に内容があることをいつの日か，永久に理解してほしい。私のいう親密さとは，これまでもそういう意味だったと思うが，近しいこと（closeness）なんだ。個人と個人が近いということであって，人間のどこかの部分が近いということは問題にしていない。親密さとは，個人のあらゆる価値を認め合う二人の人間を包み込む対人の場なのだ。

サリヴァンが選び出した職員は彼にも患者にも似ている人で，「感じやすくて（sensitive），恥ずかしがり屋（shy）で，ふつうはできのわるい（handicapped）職員と思われている人たち」であり，こういう職員は「統合失調症の患者とは君たちみたいな人だよ」と教えられた。つまり，サリヴァンは**似たもので似たものが治る**simila similibus curantur（“like cures like”）という理論に到達したのである。とはいえ，どうやって職員選択をするのか専門家のスタッフに伝えるのがむつかしかったという。

サリヴァンは対人関係の再学習こそ社会的回復に重要であると認識した。これはこうであったらサリヴァン自身が自己評価に傷を負うことなく大人になれたであろうという世界であった。この臨床の場から，サリヴァンは「選ばれし人々」との個人的生活を創り出したが，これは同時に彼にとっても回復の場でもあった。しかし彼はシェパードで得た経験を生かして満足のいく病院を自分ではつくれず，徐々に精神医学を専攻する**医学生教育**や**予防精神医学**に関心が移っていった。

９．親愛なる仕事仲間

サリヴァンがシェパードに来て親しくなった人に，女性の精神科医クララ・トムソンClara Thompson（1893-1958）がいる。彼女はニューイングランド出身のWASP（アングロサクソン系白人新教徒）のブルジョアで，超一流校出身の学歴であった。1920年代の終わり，サリヴァンはトムソンを説得してブダペストのフェレンツィ・シャードルFerenczi Sándor（1873-1933）の分析を受けさせ，戻ってきたら勉強したことを教えてもらった。トムソンの役割をサリヴァンは教

育分析者(training analyst)という言い方をしている。フェレンツィ（1985）の『臨床日記』にトムソンは症例Dmとして登場している。サリヴァンもトムソンも孤独な一人暮らしをしていたが，二人はついに結婚することはなかった。

サリヴァンがフェレンツィをヨーロッパ精神分析家の第一人者としたのは，精神分析をどのように修正すれば若い統合失調症の患者の治療に使えるかに関心があったからである。フェレンツィは1926年の秋からアメリカに６ヵ月間滞在しており，サリヴァンは彼の講演を聴いており，フェレンツィの『精神分析への寄与』を重要な著書としてあげている。何よりも二人とも重症患者に関心を寄せており，力動精神医学をあらゆる階層の人たちに普及させるのが必要であるという共通点があった。トムソン（1964）はフェレンツィの貢献として**弛緩療法**（relaxation method）をあげ，患者は愛され，分析医によって受け入れられる必要があるという考えを紹介している。これはサリヴァンが，患者を尊ぶ必要性と，患者の自尊心を維持させる必要性をつねに認識した点とつながるものであろう。

サリヴァンはトムソンをとおしてアドルフ・マイヤーの考えを知り，精神障害を行動の一つの**力動的パターン**であり，生きるための一つの反応方法であると考えるようになった。マイヤーはスイスで生まれてそこで教育を受け，1892年（26歳，サリヴァンの生まれた年）にアメリカに移民した人であり，ホワイトよりも早い時期から精神分析学はアメリカ精神医学教育に従属すべきであるという見解をもっていた。ホワイトもマイヤーも州立精神病院の病棟から精神医学の道に入った人で，そこの患者の多くは移民かその二世であった。サリヴァンも精神分析ではなく精神医学こそ教育の中心になくてはならないという地点に達し，新しい学問は**精神衛生**（mental hygiene，マイヤーの造語）の世界に貢献しなければならないという認識があった。マイヤーのいう**精神生物学**（psychobiology）は心身の二元性を揚棄したもので，これは対人関係論に至る過程の重要な一歩であった。

サリヴァン（1962）は「統合失調症の始まり」（1926）という論文の中で，はじめて**対人的**（interpersonal）という言葉を使い，「統合失調症の精神医学にあっては対人的要素が強力な要因と思われる」「精神的ストレスは社会的対人関係から起こるものであって，人間とは無関係な物理的要因からは起こらない」と述べる。彼は新しい出会いのたびに自己の中に起こる反応を観察する力を持つ人であった。

1926年の秋，サリヴァンはシカゴ大学の文化人類学教授エドワード･サピーアEdward Sapir（1884-1939）と出会い，続く10年間，二人は親友となってめざましい協力関係にあった。サピーアはドイツ生まれで，５歳の時にアメリカに渡った。二人とも孤独なアウトサイダーだったという体験が身にしみており，どちらの父親も無力だった。二人の絆によって，サピーアは文化とパーソナリティへの関心を深め，サリヴァンは社会精神科医という立場に自信をもち，さらに**シカゴ社会学派との学際的協力関係**が始まった。その中で，1920年代から30年代に『パースナル・サイコパソロジー』（1972）が書かれた。サリヴァンが中心になって1936年に設立されたワシントン精神医学校は門戸を広げて，社会科学者はもちろんのこと，法律家，牧師，看護学校教員，ソーシャルワーカーなどが学生になるのも歓迎された。

10. ニューヨーク市時代

サリヴァンはシェパードに赴任して，入院最初の24時間の臨床的重要性を認識し，患者が当初から安全保障感を得られるように特別に設計した病棟の必要なことを唱えていた。ロス・チャップマンはこの企画を支持したが，病院の内部ではサリヴァンに対する苦情が訴え続けられた。一つはサリヴァンが金銭に頓着しないこと，もう一つは病院管理側からの病棟への意見を虚心に聴かないということであった。チャップマンは彼を弁護したが，看護スタッフからも反対があり，1929年に新患センターは完成したもののサリヴァンは実地研究ができないまま1930年６月に病院を去った。

サリヴァンがシェパードでも研究計画を放棄しはじめていた頃は，彼の関心は一般学生の**精神医学教育**の改善にホワイトとともに行動した時期である。彼は，人々がどのように生き，愛し，憎しみ，自己欺瞞をするのかという初歩的な知識を教授すること，医学部学生がいかに自分の問題を回避し，別の問題と置換し，現実と妥協するかを教えなければならないと考えた。これは彼自身が必要だったことであったが，彼の努力はアメリカ精神医学会を動かすまでに至らなかった。しかし，1933年に設立されたウィリアム･アロンソン･ホワイト財団の主要な活動である，ワシントン精神医学校と雑誌『精神医学』の最大の功労者はサリヴァンであった。

サリヴァンの私生活はおぼつかないもので，1930年12月にニューヨーク市に引っ越して，統合失調症の前段階に関連した問題，つまり**強迫症**に取り組むために開業したが，半年もたたないうちに父が亡くなり，1932年には破産を宣告された。彼には精神分析の費用を払える患者は数えるほどしかいなかったが，彼のアパートメントに費用をかけすぎたためである。サリヴァンは熟練した自己観察者であったが，浪費癖だけは解決できず同僚からも多額の借金をしており，いい加減で変人という風評が広まった。当時が不況下にあっても，彼は気前がよく，ここには彼のもつ**生の困難**（difficulty in living）が端的に現れている。個人的な危機があるとき，彼の浪費癖が目立つのである。

1930年代，サリヴァンはニューヨーク市に住む芸術家や学者と頻繁に接触して，その中に，トムソンの他にカレン・ホーナイKaren Horney（1885-1952）やエーリッヒ・フロムErich Fromm（1900-1984）がいて，このグループは**新フロイト派**（neo-Freudian）と呼ばれた。

11. ホワイト財団

1933年にウィリアム・アランソン・ホワイト精神分析財団（最初の名称，後に精神医学財団に改称）が認可され，1936年にワシントン精神医学校が設立，1938年に雑誌『精神医学』が発刊された。サリヴァンの目論見は，サピーアなどとの学際的な共同研究であり，一派に偏らない対人関係論的な方向づけを持った雑誌の発刊であった。しかし，1939年にサピーアは亡くなったことから，サリヴァンはニューヨークに留まる理由を失い居をワシントンに移し，メーリーランド州ベセズダに一軒を購入した。

サリヴァンのニューヨーク撤退は，精神医学と精神分析の分裂から身をひきたいという意味があった。というのは1930年代のヨーロッパ精神分析の流入により，精神分析学派の分裂が顕著になったからである。亡命してきた精神分析家が増すにつれて，精神分析医の養成に対して，資格とか教育分析期間の最低年数とかの規定が増えた。アメリカの伝統である**折衷主義**が徐々に追いやられ，フロムやホーナイまでもフロイトの修正主義者として批判された。サリヴァンが発行する雑誌の名称を『精神医学』にしたことは，精神分析内の紛争から距離をとるためでもあった。

1939年にカトリック系のジョージタウン大学医学部がサリヴァンを新設する精神医学教室の主任教授にしたいという申し出があった。サリヴァンはそれに動かされ，フロイトの精神分析を教える提案をしたところ，大学とは物別れになった。その直後，サリヴァン（1940）の有名な**現代精神医学の概念**という，財団が主催する５回の連続講演が行われ，完全な精神医学の貢献者としてフロイト，マイヤー，ホワイトの名前が挙げられている。この講演は既存の精神医学と精神分析からの，サリヴァンの独立宣言である。

徐々にアメリカ精神分析学会の圧力がワシントン精神医学校にかかるようになったが，サリヴァンの同盟軍はフロム，さらにチェスナット・ロッジ病院のデクスター・バラードDexter Bullardであり，1942年から有名な週１回の講義が発足した。この病院にフリーダ・フロム=ライヒマンFrieda Fromm-Reichmann（1889-1957）がいた。彼女はドイツ生まれのユダヤ人で，エーリッヒ・フロムと南西ドイツ精神分析研究所を設立したが，ナチス勢力の拡大とともに1935年にバラードの招きでチェスナット・ロッジに渡っていた。

12. ベセズダ時代

メリーランド州ベセズダ市がサリヴァンの終の棲家，診療所，事務所になり，ジミー（養子）が家事を取り仕切った。バラードの経済的，専門家的支援のもとに，チェスナット・ロッジにおけるサリヴァンの講義は合計246回に達し，人に教えることによって，**対人関係論**が定式化された。フリーダ・フロム=ライヒマン（1950）はサリヴァンによって深く影響された，『積極的心理療法』を公刊している。サリヴァンはチェスナット・ロッジでの自分の講義を録音させ，この方式はワシントンやニューヨークでの講義でも続けられた。正式の講義にはノートブックをつくるようになり，これが彼の死後，本の出版に役だった。しかし，今日までに刊行されているのは録音のごく一部で，彼の生前に出版された本は『現代精神医学の概念』だけであった。

1945年，広島に原爆が投下されたことに衝撃を受けたサリヴァンはこれまででいちばん重い病気（細菌性心内膜炎）になったが，殉教の道を選んだ。カナダの精神科医G・ブロック・チザムBrock Chisholm（後にWHOの初代総裁になった）と協力しあう関係となり，戦争を生む緊張を解消するための使命のために，第２回ホワイト記念講演を開いて，チザムが「精神医学の緊急問題」という講演をおこなった。1948年の夏，サリヴァンはヨーロッパで開かれる**世界精神衛生連盟**（WFMH）を創設するための国際会議に参加すべく旅立った。この年の９月，同郷のルース・ベネディクト，シェパード病院のロス・チャップマンが死んだ。

1949年，サリヴァンはWFMHの発起人の会合に出席するためのヨーロッパから帰ろうとしていた１月14日，パリにて亡くなった。マスコミでは自殺の可能性も論じられた。フリーダ・フロム=ライヒマンによれば，サリヴァンにはコンサルテーション途中のケースが死の時点で150あったという。彼は死ぬまで多数の患者の治療責任を遂行していたのである。さらにワシントン精神学校で講義やセミナーを行い，それに雑誌『精神医学』もあった。サリヴァンはカトリックによる埋葬をのぞみ，オレンジのギボウシ（ユリ科）が添えられ，軍人としての埋葬式がなされた。彼の墓はアーリントン軍人墓地にある。彼は陸軍に感謝し，アメリカ人として祖国への義務を果たしたということであろう。

Ⅳ. おわりに

最後に，何がサリヴァンをして対人関係論を生み出したのかをまとめてみよう。サリヴァンの生涯を通観して最も印象に残る事は「移民」である。これはアメリカ文化の根底にあるもので，サリヴァンが生きた時代もこれ抜きには論じられない。サリヴァンはアイル

ランド系移民の三世であったが，幼少時代にニューヨーク州の寒村に孤立して住んだために，アメリカ**文化への同化**（acculturation）に著しく不利であった。

サリヴァンにとっての生の困難さは，①父親の影がとても薄く，祖母，母，叔母という女性の影響を強く受け，②小さな村に住んだために同級生に恵まれず，チャムシップが不完全であり，その結果，③青春期に入って親密欲求と性欲衝動が衝突して人格の解離を引き起こした。ペルーはサリヴァンの入院カルテを発見することができなかったが，サリヴァンはほぼ間違いなく統合失調症，その中でも緊張病的な精神破綻を経験した人であろう。そうでなければシェパード病院でのわずか８年の間で，彼の最も重要な臨床研究が完成することはとうてい不可能である。彼の天才たるゆえんは，自分が経験したことを徹底的に**関与観察**できる能力があったことにあり，彼の講義録には頻繁に彼自身の体験が登場している。

とはいえサリヴァンの体験が定式化されるためには，保護的な父親が必要であった。まずコーネル大学での危機を救って，彼に医学部への進学を勧めた人がいる。しかしサリヴァンが医師になっても安全保障感が得られず，シカゴ時代にもペリーが指摘するように統合失調症の体験を経過している可能性があり，彼自身，精神分析を受けたと認めている。彼の精神的危機を軽減させたのは陸軍であり，これによりサリヴァンはホワイトを知り，さらにシェパード病院のチャップマン院長の保護によって統合失調症の臨床研究を完成させた。ニューヨーク市時代は借金と引越を重ね，ここでまたしても危機的状態に陥るが，今度はチェスナット・ロッジ病院のバラード院長によって救われ，ようやく**対人関係論**が定式化された。

サリヴァンがフロイトの伝統的な精神分析そのものよりも**力動的精神医学**に親近感を覚えたのはホワイトやマイヤーの影響である。当時のアメリカの精神病院に治療を求めて来た患者の多くが移民であり，精神分析そのものよりも移民を救う精神医学が必要であった。サリヴァンは犯罪者も精神障害者も同じ人間であるという人類単一種仮説に惹かれ，対人関係論によって力動精神医学や**精神衛生**に貢献したのである。

文 献

1）Chapman AH & Chapman M（1980）：*Harry Stack Sullivan's Concepts of Personality Development and Psuchiatric Illness.* Brunner/Mazel. 山中康裕（監修）武野敏弥・皆藤章（訳）：サリヴァン入門　岩崎学術出版社

2）Ferenczi S（1985）：*Journal Clinique.* Édition Payot, Paris. 森茂起（訳）（2000）：臨床日記　みすず書房

3）Ferenczi S：精神分析への最後の貢献－フェレンツィ後期著作集　森茂起他訳（2007）　岩崎学術出版

4）Fromm-Reichmann F（1950）：*Principles of Intensive Psychotherapy.* University of Chicago Press. 阪本健二（訳）（1964）：積極的心理療法　誠信書房

5）中野明徳（2007）：H.S.サリヴァンの人格発達理論―なぜ「対人関係論」を学ぶのか―　福島大学心理臨床研究　2, 1-8.

6）中野明徳（2008a）：H.S.サリヴァンの精神障害論―対人関係論のダイナミズム―福島大学心理臨床研究　3, 1-8.

7）中野明徳（2008b）：H.S.サリヴァンの精神医学的面接論―関与的観察の方法―　福島大学総合教育研究センター紀要　5, 1-8.

8）Perry HS（1982）：*Psychiatrist of America. The Life of Harry Stack Sullivan.* Cambridge: Harvard University Press. 中井久夫・今川正樹（訳）（1985, 1988）：サリヴァンの生涯１，２　みすず書房

9）Sullivan HS（1940）：*Conceptions of Modern Psychiatry.* The William Alanson White Psychiatric Foundation. 中井久夫・山口隆（訳）（1976）：現代精神医学の概念　みすず書房

10）Sullivan HS（1953）：*The Interpersonal Theory of Psychiatry.* New York : W. W. Norton & Company. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎（訳）（1990）：精神医学は対人関係論である　みすず書房

11）Sullivan HS（1954）：*The Psychiatric Interview.* New York : W. W. Norton & Company. 中井久夫・秋山剛・野口昌也・松川周悟・宮崎隆吉・山口直彦（訳）（1986）：精神医学的面接　みすず書房

12）Sullivan HS（1956）：*Clinical Studies in Psychiatry.* New York : W. W. Norton & Company. 中井久夫・山口直彦・松川周悟（訳）（1983）：精神医学の臨床研究　みすず書房

13）Sullivan HS（1962）：*Schizophrenia as a Human Process.* New York : W. W. Norton & Company. 中井久夫・安克昌他（訳）（1995）：分裂病は人間的過程である　みすず書房

14）Sullivan HS（1972）：*Personal Psychopathology.* New York : W. W. Norton & Company.

15）Thompson CM（1940）：*Interpersonal Psychoanalysis.* Basic Books. 大羽蓁・沢田丞司訳（1972）：人間関係の精神分析　誠信書房